

2011 年度「機械の日・機械週間」記念行事報告

2011 年度「機械の日」実行委員会
幹事 吉田英生 (京都大学)

報告の骨子

- ・「機械の日」記念行事を 2011 年 8 月 6 日と 7 日に大阪科学技術センターで開催しました。「特別フォーラム」、「機械遺産認定表彰」、「記念講演会」、「絵画コンテスト表彰」を四つの柱としました。
- ・各内容は概ね好評でしたが、当初のねらいに反して、学会外の一般参加者は少なく、また学会内では若手・中堅の参加者も少なく、今後への深刻な課題を残しました。そこで、改善に向けての一提案を文末にさせていただきました。

1. はじめに

2006 年 8 月 7 日に創設された「機械の日」の記念行事が、本年は 8 月 6 日と 7 日、大阪科学技術センター（大・中・小ホール）で開催され、大過なく終えることができました。ご関係の皆様には深くお礼申し上げます次第です。

今回は久保司郎実行委員長（大阪大学）の下、関西支部が主担当することとなりました。8 月 7 日の「機械の日」に向けて第 1 回の実行委員会（全 16 名）を開催したのがちょうど 8ヶ月前の 2010 年 12 月 8 日、格闘の火蓋が切られたという意味で実行委員にとってはまさに開戦記念日となりました。

2. 実行委員会がめざしたことと四つの柱

実行委員会では、「機械の日」は年々定着してきているというものの、創設にあたって意図されたような、広く一般の人々にも機械工学の理解を得ていただくという意味ではまだまだ不十分であるという現状認識に立ち、今回こそ飛躍をはかろうという強い願いとともに出発しました。さらに、貴重な時間とエネルギー、それに少なからぬ費用を投入して行う以上、ルーチンワークをこなすだけのことで終わらせたくないという思いもありました。そこで、学会内部の式典的性格は必要最低限に抑え、できる限りの努力を一般市民に振り向けることを基本方針としました。その第一歩が、あいにくというべきか幸いというべきか本年は 8 月 7 日が日曜にあたったため、前日の 6 日も含めた週末の 2 日間を「機械の日」記念行事に充てる決断でした。ちょうど関西支部では、「特別フォーラム」という一般市民向け公開行事を 2008 年度から毎年 8~9 月に開催しておりましたので、これも「機械の日」の一環として組み込むことは自然な流れでした。この結果、関西支部主催・本部共催の「特別フォーラム」、そして本部主催の「機械遺産認定」、「一般講演会」、そして子供達にも機械への夢を描いてもらう「絵画コンテスト」を四つの柱として、事務局（本部信濃町と関西支部鞆本町）との緊密な共同作業で企画準備をしました。

3. 特別フォーラム：この危機を契機として、機械に支えられた現代文明のこれからを考える（8 月 6 日 12.40~17.05）

約 5ヶ月前の 3 月 11 日に発生した東日本大震災で暴走した東京電力福島第 1 原子力発電所の事故は、機械工学への猛省を促すとともに、これからの極めて重要な課題を突きつけました。その課題は、単なる技術論だけではなくもっと根源的な文明論に立ち戻らない限り解決の方向も定まらないといった至難のものです。そこで、講師には、金子成彦氏（東京大学 日本機械学会 筆頭

副会長）、小澤守氏（関西大学 元日本機械学会 関西支部 常務幹事）、松久寛氏（京都大学 元日本機械学会 副会長・元日本機械学会 関西支部 支部長）の他に、文化人類学の上田紀行氏（東京工業大学大学）、哲学の鷺田清一氏（大阪大学）をお迎えして開催しました。



4. 機械遺産認定表彰（8 月 6 日 17.20~18.00）

2007 年 6 月に創立 110 周年を迎えた本会の記念事業の一環として創設された「機械遺産」は、本年は 7 件（第 44 号~第 50 号）が新たに認定されました。まず、池森寛機械遺産委員会委員長（西日本工業大学）から選定趣旨説明と選定経過報告がなされ、次いで佐藤順一会長より感謝状と認定証が授与されました。そして 7 件の受賞者を代表して、第 49 号の河村新吾氏（YKK（株））と第 50 号の高見沢和夫氏（（株）高見沢サイバネティックス）から自社の機械遺産に対する熱い心のこもったご挨拶をいただきました。



5. 前夜交流会（8 月 6 日 18.10~20.00）

本来なら全行事の締めとして交流会を行いたところですが、日曜夕刻からでは週明けの仕事に向けて帰宅を急ぐ参加者が少なくないと予想し、土曜の前夜交流会としました。山口貴弘実行委員（ダイキン工業（株））の司会の下で、学会会員を中心に機械遺産表彰者もご招待してなごやかな時間を楽しみました。

6. 記念講演会（8 月 7 日 10.00~15.00）

記念講演会は一般市民に機械工学を身近に感じていただくための中心行事です。実行委員会が講演内容を検討した結果、歴史的なところから「万能の天才」ともいわれ多数の機械の素ともいえる機構を考えたいレオナルド・ダ・ヴィンチ、建設計画がいよいよ具体化したりニヤ新幹線、そしてこれからの世界を大きく変えて

いくと期待されるロボットの3本柱から構成しようということになりました。そして、神谷和秀氏（富山県立大学）「レオナルド・ダ・ヴィンチの世界」、白國紀行氏（JR 東海）「超電導磁気浮上式鉄道の実用化に向けて」、石黒浩氏（大阪大学）「人の生活の中に入ってくるロボット」の講演を、昼休みをはさんで聴かせていただきました。さらに、講演だけではなく、神谷氏からは父の長幸氏と弟の佳孝氏により製作された木製復元模型の展示が、石黒氏からは大和信夫氏（ヴイストン（株））のご協力により Robo Cup 2004~2008 で5連覇を達成したロボットのデモンストレーションがなされ、興味を一段と高めていただきました。



神谷和秀氏

白國紀行氏

石黒浩氏

7. 絵画コンテスト表彰（8月7日 12.00~12.20）

子供を対象とする企画として、従来は作文コンテストを行っていましたが今回は絵画コンテストを試行してみました。久保実行委員長から応募状況と選考経過が説明され、未就学児童から高専生徒まで合計で35件の作品の中から、市川菜琴さん（幼稚園年長）「さばくにあまぐもきかい」、下茂海翔君（小学校2年生）「地震にまけない『ウルトラレンジャ ビートル』」、久保竜希君（小学校5年生）「オゾンホール修復飛行船 O3-ZES21」が優秀賞に選ばれたことが報告されました。佐藤会長から市川菜琴さんと久保竜希君には表彰状と副賞として天体望遠鏡が贈呈されました。なお、都合により出席できなかった下茂海翔君からはビデオレターが放映され、また市川菜琴さんは幼いためステージ上にはお姉さんの菜月さんが付き添いました。表彰式後、午後の講演会までの間、参加者には無料のランチオンを提供しました。



左から久保司郎実行委員長、市川菜月さん、市川菜琴さん、久保竜希君、佐藤順一会長

8. 各種新聞やテレビでの報道

「機械の日」が2日後に迫った8月5日の日本経済新聞朝刊には1面全面で、また同日の日刊工業新聞には見開き2面全面で「機

械の日」の広告記事が掲載されました。さらに、「機械遺産」に関しては多くのマスコミに取り上げられました。日本機械学会事務局で確認している新聞・テレビ報道は、上記2件以外に以下の通りです。

- ・7月25日：読売新聞朝刊（機械遺産7件認定の紹介）
- ・7月25日：朝日新聞朝刊（機械遺産7件認定の紹介）
- ・7月25日：日刊工業新聞（機械遺産7件認定の紹介）
- ・7月25日：信濃毎日新聞朝刊（岡谷蚕糸博物館の繰糸機群、多能式自動券売機 [長野県内初の機械遺産認定として紹介]）
- ・7月25日：北日本新聞朝刊（ファスナーチェーンマシーン [富山県内初の機械遺産として紹介]）
- ・7月25日：共同通信社配信による記事掲載（全国地方新聞およびWEB等）
- ・7月26日：日本経済新聞朝刊（機械遺産7件認定の紹介）
- ・7月26日：茨城新聞朝刊（幹線用電気機関車 ED15 形、油圧シヨベル UH03 認定の紹介）
- ・7月27日：朝日新聞夕刊（窓 論説委員室から「機械遺産から学ぼう」）
- ・7月28日：機械新聞（機械遺産7件認定の紹介）
- ・7月29日：科学新聞（機械遺産7件認定の紹介）
- ・8月10日：TBS系「みのもんだの朝ズバッ！」（機械遺産紹介）
- ・8月22日：朝日小学生新聞（機械遺産7件認定の紹介）

9. その他の「機械の日」「機械週間」行事

例年同様に、展示会「日本の先端科学技術の紹介」—日本機械学会賞（技術）、優秀製品賞、認定機械遺産の紹介—が7月26日~8月8日に国立科学博物館で開催されました。また、その初日夕刻には小宮山宏氏（（株）三菱総合研究所理事長 前東京大学総長）による特別講演「日本『再創造』—プラチナ社会の実現に向けて—」も行われました。その他、全国各地の大学や高専を中心にさまざまな行事が開催されました。

10. 振り返って：何ができたのか？ 今後何をすべきなのか？

前項までとは異なり本項では、筆者が直接・間接に関与した範囲で一步踏み込んで「本行事を通じてわれわれは何ができたのか？ 今後何をすべきか？」ということ振り返って考えてみたいと思います。独断ではあるかもしれませんが偏見ではないことを願っております。

まず、意義ある成果を挙げていると実感するのは機械遺産認定です。今回で50件となった機械遺産はわが国の機械工学の歴史におけるかけがえのない記念碑として定着していると思います。その意義深さは受賞者の熱い言葉にも十分感じ取れますし、会員や一般市民への啓蒙という点でも確かな手応えがあると思います。

しかし、その他の記念行事では筆者は失望した点が少なくありません。といっても、申すまでもなく企画の質そのものでなく、主に企画が及ぼしたインパクトの面からです。

準備段階でまず自分達の非力を感じたのは、絵画コンテストの応募が少なく締切を半月延長した5月16日ですえわずかに35件しかなかったことです。もちろん応募された作品はいずれも力作で子供たちの底知れぬパワーを感じさせるものでしたが、本会が本当に一般市民に影響力を持っているなら、もっと多くの関心を集めることができたはずだと思うのです。

さらに、本会会員に加え一般市民をも対象とした6日の特別フォーラムでも7日の記念講演会でも、定員約300名の大ホールが一杯になるかという期待あるいは心配とはほど遠く、最多のときでも100人あまりでした。両日とも、それぞれのテーマではこ

れ以上は望めないような斯界の第一人者をお招きできたと自負しておりますが、にもかかわらず、でした。

なお、特別フォーラムについては、人数的問題に加えて別の批判もありました。講師の上田氏のツイッターから、学会外部からの声が直接聞ける機会は貴重ですので抜粋引用します。

[UedaNoriyuki] 昨日の大阪での機械学会シンポジウム。鷺田清一さんも私もショックを受けたのは、会場に来ていた元エンジニアや研究者とおぼしき人たちが、原発事故を他人事だと思っているということ。自分たちの世代、自分たちが関わってきた科学技術、自分たちの組織が生み出したという自覚は非常に希薄なのだ。「この危機を契機として、機械に支えられた現代文明のこれからを考える」というテーマだったので、工学者やエンジニアの人たちは当然「危機感」のかたまりだと思っ

て臨んだのだが、危機感にはななかった。(中略)

[nobitasunny] 私も文系人間です。タイトルにある「この危機を契機として…」技術者が、何を思い、どのような姿勢で、これから向き合おうとしているのかを知りたくて、一般参加として講演会に足を運びました。まず、驚いたのが、参加されている方々の年齢層です。すでにリタイアしているであろう方々が、半分以上。これから…を語る講演会に、どうして若い方の参加が少ないのか、疑問を抱きました。今後日本の技術を背負う若い方々の、今回の事故に対する意識の希薄さを感じざるを得ませんでした。(中略)

[UedaNoriyuki] 昨日からの議論。機械学会の会長さんはじめ、このシンポジウムを企画した人々には明確な危機感と責任感があり、だからこそ危機感の薄い人々に対してこのフォーラムを投げかけたわけで、その意味では、鷺田先生や私が苛立ったという姿を見せたことも含めて、成功だったのでしょう。

個々の受け止め方には個人差があるので必ずしも全面的に首肯

するものではありませんが、もともと全体の参加者が少なかったこと、そして一般参加者が少なかったこと、さらに本会の若手あるいは中堅の方がほとんどいなかったことは事実です。本会の若手・中堅について考えると、昨今は誰しも例外なく忙しいので、本行事への不参加と原発問題への無関心とは直接には結びつかないと思いますが、その底に流れる雰囲気を上記ツイッターのお二人は敏感に感じ取ったのかもしれない。

一方、記念講演会の方は親子連れの聴衆を多数見込んでいましたが、これも全くの期待はずれで、子供は皆無といってよく、やはり年配の方が目立ちました。

このような現実と直面しますと、当初の意気込みや実行委員会・事務局の懸命の努力にもかかわらず、今回も結局一般市民への啓蒙とはほとんど無縁の学会内部行事だったのではないかと、無念さに襲われます。特別フォーラムや記念講演会にご参加いただいた方々からは、「有意義な内容であった」と評価をいただいたことが大いなる救いとはなりましたが。

そこで来年に向けて、今回相当な時間とエネルギーを投入した立場から一つ提案させていただきます。若手や中堅の会員に「機械の日」に関心を持たせることはその気になれば比較的簡単です。しかし学会外の一般市民に対して「機械の日」あるいは「機械」に自発的な関心が向くようにすることは至難です。(読売・朝日・毎日・産経などのマスコミで大宣伝をすれば別ですが。) そのためには理科教室やキッズシンポのような草の根活動よりはもう少し組織的・定常的なレベルで行動を起こし、化学反応同様にある敷居値を越す必要があると思います。例えば、故竹内均氏が「Newton」誌を発行して科学への定常的な啓蒙を重ねたように、工学分野でも機械学会がイニシャチブを取って一般向け工学雑誌を創刊して定常的に啓蒙を重ねる工夫などが必要不可欠ではないでしょうか。

「機械の日・機械週間」 絵画コンテスト開催報告

2011年度「機械の日」実行委員長 久保 司郎

「機械の日・機械週間」は2006年8月7日に日本機械学会によって制定されました。その後、毎年8月7日を中心に「機械の日・機械週間」に関する行事を展開してきています。今年は、機械工学関連学協会と協力して企画を行いました。

行事の一環として、昨年まではジュニアの皆さんによる作文コンテストを実施してまいりましたが、今年は「夢の機械・キカイ、未来の機械・キカイ」をテーマに絵画を募集しました。多くの応募をいただき有難うございました。応募されました35件の作品の題は、右記の通りです。本年3月11日の大震災を受けて、『地震にまけないウルトラレンジャ ビートル』、『ガレキ eating マシン』などの作品が寄せられており、また関連するエネルギー問題、環境問題についても『音から電気をつくるロボット』、『さばくにあまぐもきかい』、『オゾンホール修復飛行船』といった作品も寄せられました。これらの絵の発想と力強さからは元気ももらいました。さらに、食べ物に関する『うさぎ型アイスクリーム製造機』、『ゴミを美味しいジュースにか

えるロボット』は、楽しい気分にさせてくれます。このほかに、『虫語きかいでうんどうかい』、『ドクター歯磨きマン』、『家で魚の病気が治せる機械の発明』の絵は、絵としても面白く、また連想を膨らませてくれます。

慎重に審査を行いました結果、『さばくにあまぐもきかい』、『オゾンホール修復飛行船』、『地震にまけないウルトラレンジャ ビートル』を優秀賞に決定しましたが、件数に限りがあるため優秀賞に選ぶことができなかった作品にも多くの優れた作品がありました。

応募作品には、大人の発想を超えたものがあります。今回の絵画コンテストの応募作品やコンテストそのものが織姫が布を織る天上の「機」をイメージし、未来の機械を考え、夢を育む機会となれば幸いです。最後に、絵画コンテストにご協力いただきました皆様、審査にあられた皆様、学会事務職員のみなさまに厚く御礼申し上げます。

[受賞作品は、本誌の表紙および口絵ページに掲載]